

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

育まれる観察力～カニ～／社会福祉法人さつき福祉会 さくらさくら幼保連携型認定こども園（宮崎県）

地域や園にはどのような自然がありますか？

今回の事例は、園庭で関わることのできる身近な生き物「カニ」に焦点を当て、地域の特徴的な自然である干潟での体験や、異年齢や保護者との交流場面の体験を探り、考察では、今後の保育の方向性を明らかにしています。

子どもたちが生き物を観察したり関わりを重ねたりして成長していることを、異年齢や保護者との交流の姿から捉えることができます。



● 子どもの言葉に注目して／4～5歳児

✿ 園の実態・取り組みの経過

- ・ 本園が移転し、干潟での生き物探しに取り組み始めて3年目になる。
- ・ 当初から、園庭にはたくさんのカニが遊びに来ていたが、その頃はただ「カニがいる！」「捕まえよう！」という子どもたちが多かった。
- ・ 2年目から月に2回干潟に行くようになると、子どもたちは図鑑で生き物を調べるようになり、園庭のカニの名前に興味をもつようになった。
- ・ 干潟での生き物探し3年目の今年度の5歳児は、カニに興味をもつようになった昨年の5歳児に、4歳児の時にカニのことを教えてもらっている。5歳児が園庭のカニに関わる姿を見聞きし、情報を得ているので、園庭のカニが『ベンケイガニ』と『クロベンケイガニ』だということが分かり、その知識やカニへの興味をもって干潟での“生き物探し”をしている。

✿ 保育者の意図：観察から芽生える「科学する心」を育むために

子どもたちが、自らカニをじっくりと観察する感性、発見や疑問の対象に関わる意欲、疑問や問題を解決し新たな発想で活動を進める創造性の芽生えを育む。

毎月2回実施する干潟での「生き物探し」や園庭でのカニの観察の姿を捉え、カニに関わる機会がより多くなり興味が深まるように援助や環境の工夫をする。

昨年の保育を振り返り、生き物との関わりを通して異年齢や保護者との交流が体験の深まりにつながるように工夫する。本記録では、特に、言葉で表現している場面に注目する。

✿ 場面1：4歳児の時の初めての干潟体験（3月下旬）

子どもの言葉や姿	保育者の読み取り 読み取り ・保育者の関わり
① 「魚がおるところ」「水があるところ」「鯨がおるところ」	① 干潟へ行く前に、子どもたちに干潟のイメージを出し合う機会を作る。

② 「うわぁ！広い！ここが干潟やと？」初めて干潟を見る子どもたちは、その広さにまず驚いていた。 「魚おるかな？」「カニおるやろか？」「鯨はおらんね」「水じゃなくて土やね」	実際に干潟を見て、子どもたちから出た干潟へのイメージとどのように違うのかを尋ねた。イメージと違う点に気づいていた。
③ 「何あれ?!」「見てん！何か跳んじよるよ?」「魚?」「捕まえようや」「何でこんな逃げ方が速いと?!」と、言い、簡単には捕まえることができない。泥んこになりながら、やっと捕まえると、観察ケースに入れる。 「見てん！口がパクパクしちょる!」と初めて間近で見るトビハゼを興味津々で観察していた。	読み取り 捕まえて間近で見たいと思い行動することで、見る観察から、動きなどの特徴を捉える観察をしている。 ③ 園では見られない生き物やその特徴に気づく喜びに共感する。干潟の生き物は干潟で逃がして帰ることを共有する。
④ 「見てみて！カニ捕まえたよ」「こんな大きい貝がいた」と、いろいろな生き物に関わったり、見つけた生き物を保育者や友達に見せたりする。 実物と図鑑の写真の色や形を見比べ、似ている生き物の写真を探し当て、貝は「オキシジミガイ」、カニは「アシハラガニ」と分かる。	④ 図鑑での調べ方が分かるように、実物と写真の色や形を見比べる声掛けをし、保育者も一緒に探す。



● 考察・今後の方向性

初めての干潟ということで、いろいろな生き物に興味を示し、自分で触ってみたり、観察したりすることができていた。図鑑を使って名前を少しずつ覚え、友達にも教える姿があり、友達同士の繋がりがみられた。まだ初めての干潟ということで、生き物を見つけることが主な目的となっているため、これから回数を重ねていくことで、変わっていく子どもたちの姿を捉えていきたい。

✿ 場面2：園庭での4歳児との交流場面（5歳時の6月上旬）

子どもの言葉や姿	保育者の読み取り 読み取り ・保育者の関わり
進級し5歳児になった子どもたちは、干潟では月に2回のペースで生き物探しをしている。 園庭に出た生き物を見つけると、興奮して関わり、「カニがおる」「見てん！これベンケイガニやよ」といったり、図鑑で調べて「やっぱりベンケイガニやね」と確認したりする。	読み取り 干潟では捕まえた生き物は持って帰らず、園庭でも、捕まえた生き物は遊びの時間が終わると自分たちで戻すようになる。
4歳児がカニと関わる姿を見て、「カニはこうやって持つと挟まれんちゃよ」と教えたり、「カニには優しくしてよ」と伝えたりする姿がある。	読み取り 干潟で何度も関わり、カニの掴み方が上手になる。4歳児の姿に添って、カニとの関わり方を伝えている。
Sちゃんが、「先生！このカニ、卵があるよ!」と言うと、その声に応じ子どもたちが集まる。卵を持ったカニを4歳時、5歳児に見せると、カニの卵を不思議そうに観察する。 Rちゃんは「これメスやっちゃ」と言う。 その後、カニの性別にも興味を示し観察すようになる。また、4歳児はカニを持たせてもらったり興味をもって観察したりするようになる。	Rちゃんが性別に興味を示したので、カニの性別が載っている図鑑を子どもと一緒に見ながら、子どもたちが実際のカニへの興味を深め、観察できるようにする。

● 考察・今後の方向性

5歳児のカニと関わる姿や自分たちに教えてくれる言動から4歳児も関わり方を学び、カニの捕まえ方や体に興味をもつようになってきた。子どもから子どもへ伝わることで、興味の深まりや自信につながることを感じた。保育者がいろいろな情報を伝えていくだけでなく、5歳児が考えて学んだことを、他のクラスの子どもたちへも伝えていけるような言葉かけや環境作りをしていきたい。

✦ 場面3：干潟での5歳児と保護者の交流場面（5歳時の6月中旬）

子どもの言葉や姿	保育者の読み取り 読み取り ・保育者の関わり
ここ穴が空いてるね！何の穴かな？」との保護者の問いに、「これね、カニの穴やよ！」と、教える。 「じゃあ穴を掘ればカニがおると？」と話しながら、子どもたちと保護者と一緒にスコップで穴を掘る。 「あっ！こっちに穴が続いちょるよ」「ほら！今度はこっち！」と、穴が縦や横に伸びていることを面白がる。	干潟で生き物探しをする日程を保護者にも知らせると、数名が参加する。 保護者が穴のことを問いかけると、干潟にいている穴に興味をもつ子どもが出てきた。
「あっ！ホントにカニがおった！」と穴がどこまで続いているかを調べていると、本当にカニがいたことに子どもたちはびっくりしていた。 「この穴は小さいから、小さいカニがいたよ！」と穴の大きさによって、隠れているカニの大きさが違うことも保護者と一緒に学んでいた。 また、「これはアシハラガニって言うんだよ。ほら、ここに載ってるわ」と保護者と一緒に図鑑を見て教える子どもの姿も見られた。	読み取り 保護者と一緒に図鑑を見ることで、詳しい解説まで読んで情報を得ていた。 

● 考察・今後の方向性

干潟での活動に関心がある保護者が多く、保育者とは違う目線で、夢中になって子どもたちと干潟の生き物探しを楽しんでいたため、子どもたちには新しい発見や気づきが引き出され、探究活動につながる体験になった。今後も、子どもたちの疑問や探究などの実態に添って保護者との交流活動を適時取り入れていきたい。